

「三つの祖国」に生きる 越境者

私たちが生きる意味を支える場は、私たちが生まれ育った国境のなかに収まるとは限らない。生きるために国境を越え、思想の場を越え、生活の場を変えてきた人々は、自分が生きた軌跡をどこに残すのか。国境を越えた移動により互いに異なる経歴を背負う人々が出会う機会が増えていながら、あるいは増えているからこそ、いまなお民族という物語が互いに相反する主張をぶつけあうなかで、民族の枠組みを越えた新しい物語の可能性を探る。

「特集にあたって」

三つの祖国——ルーツの祖国、暮らしの祖国、理念の祖国

篠崎香織

本特集は、越境者の事例として言及されることが多い華人とユダヤ人を扱うものである。いずれの論文も、華人やユダヤ人に関する「定説」の根拠とされてきたいくつかの歴史上の出来事を従来とは異なる視点から見つめ直したり、あるいはそうした出来事の傍らで起こっていた「定説」とは異なる志向性を持つ動きに着目したりして、「定説」を相対化する新たな解釈の可能性を探る試みを行っている。ここで「定説」と表現しているのは、華人およびユダヤ人が自前の国民国家を建設し、その国家を通じて自らを世界に位置づけることを歴史の頂点とするような見方である。なおこうした見方は、個人は民族

としてまとめ、自前の国家を持つことによつて自立するという考えに基づいており、こうした考えそのものは華人やユダヤ人を対象とする研究のみに限られるものではない。そこで本特集は、華人とユダヤ人の事例を通じ、越境者と国家との関係をとらえる新たな視点の導入を試みたい。

越境者に関する議論は、越境者のアイデンティティの所在を主な論点の一つとし、それを国家との関わりでとらえるものが多い。過去の研究では、一民族一国家を理念型とする国民国家の枠に当てはめて論じることが少なくなかった。その際、民族を同じくする者が自決の単位として国家を作ることと、

文化的な共同体と政治的な共同体が一致することが前提とされた。だがこうした見方は、徐々に相対化を迫られてきた。現実の世界では、一つの国家のなかに複数の民族が存在したり、一つの民族が複数の国家に分かれていたりするなど、文化的な共同体と政治的な共同体が一致しないことがむしろ一般的だと指摘されている。さらに、一人の個人に一つの国籍という前提すらも、重国籍を認める国家が一九九〇年代以降増加しているという現実のなかで、相対化が迫られている。これは、本特集で扱う華人とユダヤ人についても例外ではない。

Ⅰ 華人とユダヤ人をめぐる視点

東南アジアの華人とヨーロッパのユダヤ人は、以下のような境遇において共通していると指摘されてきた。「ホーム」を失い、あるいは「ホーム」を離れ離散した彼らは、移住先の権力者に金庫番として重用された。ヨーロッパのユダヤ人は一八世紀末頃から、東南アジアの華人は一九世紀末頃からその地位を失った (Reid 1997: 80) が、それまでに経済的・社会的に実力をつけており、移住先の社会に進

出していった。しかし新たな競合者である彼らは、移住先の社会において歓迎されざる存在として扱われることが多かった。こうしたなかで、移住先の社会への同化を志向する人がいた一方で、自前の国民国家を作ることで問題を解決しようとする人も現れた (Reid 1997: ゲルナー二〇〇〇)。

このうち、自前の国民国家の建設について、以下のように説明されてきた。

中国を離れ東南アジアに移った華人は、清朝政府が一八六〇年代に在外華人を積極的に包摂する政策に転じたなかで、居住国における保護を中国の公権力に期待した。その期待は中華民国の成立で一気に高まり、東南アジアの華人は自前の国家である中華民国への志向性を強めた。中華人民共和国の成立と社会主義という普遍性の追求に、希望を見いだす者も多かった。

「ホーム」の公権力を盾にして世界に自らを位置づけようというこうした戦略は、「ホーム」を失ったユダヤ人には採り難いものであった。そうしたなかで一九世紀末頃から、失った「ホーム」を取り戻し、ユダヤ人による国民国家の建設を目指すシオニズムという動きが、ヨーロッパやアメリカのユダヤ人の間に現れた。その延長線上に位置づけられるの

が、イスラエルの建国である。

これらの説明は、個人が自らを世界に位置づけるうえで、民族を同じくする者で構成された一民族一国家を通じて対応という側面を強調している。これに対して現在にいたるまでに、一民族一国家を通じて対応以外の側面が指摘され、そうした対応が積極的・肯定的に評価されつつある。

二〇世紀半ば以降の東南アジアでは、自らを中国の国民ではなく、居住国の正當な一員として積極的に位置づける華人が増大したとされる。こうした華人の思いを掬うようにして、文化的な共同体と政治的な共同体は必ずしも一致しないこと、また個人の帰属意識も政治的な意識と文化的な意識とを切り離すことができ、相互に矛盾しないことが指摘された。^{*1}

また、多民族国家における国家建設が包摂と排除を繰り返すなかで、多文化主義的な包摂の試みに肯定的な評価が与えられてきた。^{*2} こうしたなかで、多民族国家の一構成員という華人の存在が、観察者の視点のみならず現実社会においても認知を得つつある。他方で、東南アジアに移住した華人や、その子孫として東南アジアで生まれ育った華人の中には、東アジアや欧米、オーストラリアなど東南アジア域外に越境する者も少なくない。こうしたなかで、帰

属意識の最終地点を東南アジアの居住国に固定してとらえることにも留意が求められ始めている。^{*3}

イスラエルの建国は、パレスチナ難民問題を生み出した。これに関して、「ユダヤ・ナショナルホームの誕生は、かつてはマイノリティとして迫害される被害者となってきたユダヤ人が主権国家のマジヨリティとなり、他者を抑圧する加害者の立場に転落したことを示す、ほろ苦い歴史的道標ともなっている」との指摘もある（赤尾・早尾二〇一一）。こうしたなかで、ユダヤ人のための国民国家であることが求められるイスラエルは、政教分離の原則をめぐる問題や、多様な地域からの移民で構成されるユダヤ人社会の言語的・文化的多様性、アラブ人という少数派の存在など、実体としては多様性に富む社会であることが指摘されている（白杵一九九八・二〇〇八・二〇〇九）。また、離散の否定に行きうるシオニズムは、本来は離散の中に生きるための方策として構想されていた側面もあることが指摘されるなど、ユダヤ人が国家を通じて自己を世界に位置づけるなかで、本来は多様なあり方が構想されていたことが改めて論じられている。こうした構想が、本来の構想との断絶をもちあみつつ、ホロコーストや国際政治におけるさまざまな思惑と結びつき、一民族

一国家的な国民国家に行きつく過程が、改めて検討されている。^{*4}

これらの議論は、一族一国家的なあり方が少数派を抑圧しうる側面に着目し、それがひいては個人の抑圧にもつながりうることを指摘している。こうした限界を乗り越えるうえで、国家という枠組みそのものを否定したり回避したりするのではなく、多様性に対応しうる国家を構築する試みに着目したり、そうした試みが進展することを期待して国家の構成員の多様性を白日の下にさらしたりする。このなかで、多様性を提供する一背景として、越境者の存在に目が向けられている。本特集に収めた論文は、こうした最近の研究を踏まえ、華人やユダヤ人をとらえるものである。

II 「三つの祖国」

越境者に関する議論は、個人のアイデンティティの所在について、多様な可能性を提示しようと努めてきた。しかしその試みは、十分に成功していないようにも思われる。その要因の一つに、越境前の国家と越境後の国家という二つの軸を設定し、その間

で越境者のアイデンティティをとらえようとしてきたことが考えられる。二つの軸は対極的な関係に置かれるために、越境者の立ち位置はどちらの国家にあるかが問われがちとなってしまう。^{*5}

本特集に収められた五本の論文は、いずれも複雑な立ち位置をとる越境者の事例を扱っている。いずれの事例も、「越境前の国家か？ 越境後の国家か？」という視点や、「出自国か？ 居住国か？」という視点でとらえようとすると、据わりの悪い事例となっている。あるいはこうした据わりの悪さが、越境者を取り巻く本質的な状況なのかもしれない。

こうしたなかで本特集では、「三つの祖国」という枠組みを試みに導入してみたい。三つの祖国とは、「ルーツの祖国」「暮らしの祖国」「理念の祖国」である。

ルーツの祖国とは、自らの出自をたどれる場所を指す。それは、越境者が越境する前に生まれ育った場所であることもあれば、父祖が生まれ育った場所ではあるが、自らは直接的なつながりを持たない場合もある。暮らしの祖国とは、生活の基盤や拠点となる場所である。理念の祖国とは、自らを取り巻く現状を改善していくうえで、参考となりうる理想的な社会や秩序が実現していると目される場所である。

三つの祖国を時間軸に置き換えるなら、ルーツの祖国は「祖先や自らのたどって来た道のりとしての過去」に、暮らしの祖国は「現状を肯定する現在」に、理念の祖国は「あるべき姿としての未来」にそれぞれ対応すると見ることができ、また空間軸に置き換えるなら、ルーツの祖国は「出自国」に、暮らしの祖国は「居住国」に、理念の祖国は「これからの永住国」にそれぞれ対応すると見ることができ。

しかし、三つの祖国と、時間軸および空間軸とのこうした対応は、あくまでもモデルの一つにすぎない。実際の対応関係は、本特集に収めたそれぞれの論文が示すように、はるかに複雑な様相を呈する。それは越境者が、自らの関わる場に対する認識の変化に依り、また越境を余儀なくされるなかで場に対する認識を変化させることで自らの置かれた状況に適應するためである。その結果、三つの祖国と時間軸および空間軸との対応は複雑なものとなるばかりか、二つ以上の祖国が同じ空間に重複して存在したり、それぞれの祖国が複数存在したり、祖国が現れたり消えたりすることがある。

越境者のアイデンティティは、必ずしも特定の国民国家に一元的に収斂するものではない。しかし本

特集では、越境者と国家との関わりに着目するという立場から、「祖国」という表現を使うこととした。本特集で各論文が着目する越境は、単なる場所の移動ではなく、ある特定の制度やルールが流通する場の間での移動を扱っているためである。本特集では、ある特定の制度やルールが流通する場を国家と表現し、その中には国民国家のみならず、帝国や植民地国家などさまざまな統治原理に基づく国家を含める。これにより、越境者の生き方が国家に規定される側面と、そうした状況を踏まえて自らの手で国家を規定し直そうと積極的に関与する越境者の生き方の両方に目を配ることを目指す。

Ⅲ 各論の位置づけ

村岡論文は、アメリカでシオニズムの動きが現れた時期に、一民族一国家とは異なる発想で同胞を救おうとした試みを示す。この中で示されるのは、日露戦争中にアメリカ・ユダヤ人が日本を積極的に支持した事例である。一九世紀末のアメリカには、ロシアで頻発するボグロム（ユダヤ人迫害）を逃れ、東欧系ユダヤ人が押し寄せて来た。当時すでにアメ

リカ社会のマジヨリテイに溶け込み、社会的上昇を遂げていたドイツ系ユダヤ人は、東欧系ユダヤ人が自らを「他者」として目立たせようことを懸念しながらも、東欧系のユダヤ人を助け、ロシアのユダヤ人問題に対して具体的な行動を起こした。アメリカのユダヤ人エリートたちは、自由と平等を愛するアメリカ人として行動することによって、アメリカの外交力を盾にすることに成功し、アメリカを後ろ盾にしてロシアのユダヤ人問題に対応した。この事例において、暮らしの祖国はアメリカにあたる。ルーツの祖国は、父祖や自身がアメリカに移住する前に暮らしていたヨーロッパ諸国という認識が強く、アメリカ・ユダヤ人社会における多様性がユダヤ人自身によって認識されていた。理念の国は、自由と平等を掲げるアメリカであった。ただし二〇世紀初頭のアメリカでは、反ユダヤ主義が高まる可能性が懸念され、理念が完全に実践されるかどうか危うい状況があった。こうしたなかでアメリカ・ユダヤ人は、暮らしの祖国と理念の祖国を一致させる行動を率先することで、アメリカでの自らの居場所を確保するとともに、東欧の同胞を救おうとした。

北論文は、イスラエルの建国を契機として中東で数次にわたる紛争が巻き起こった時期に、主流派の

論理を逆手に取り、文化的背景が異なる人びとと連帯を組み、非主流派の居場所を拡大しようとしたアメリカのユダヤ人に着目する。東欧からのユダヤ人の流入は結局、アメリカにおける反ユダヤ主義を引き起こした。その一つが、大学入学におけるユダヤ人学生数の制限であった。^{*}ユダヤ人は、自らにとつてよりよい秩序を構築するうえで、平等、自由、正義という「アメリカの理想」を自ら実践することを掲げ、一九四八年にアメリカにブランドアイズ大学を創設した。同大学の学生たちは、公民権運動に積極的に参加し、ブラック・ナシヨナリズムを積極的に支援した。この事例においては、ルーツをたどれる場所に国民国家イスラエルが成立していたが、イスラエルがルーツの祖国としてとらえられていたわけではないことが示される。またこの事例では、村岡論文と同様に、アメリカが暮らしの祖国であり、かつ理念の祖国でもあったが、村岡論文が扱った時代に比べ、二つの祖国の間で乖離が顕著となっていた。アメリカのユダヤ人は、この乖離を修正するために、理念を率先して実践し、そのなかで文化的背景が異なる人びとと連帯した。ユダヤ人がヨーロッパで試みた民族を超えた連帯は、多民族の国民国家アメリカで実現したのである。このことは、ユダヤ

人は民族を超えた連帯を実現すべく、それが実現し
そうな制度やルールが実践されていると目される場
に移り、自らに望ましいかたちでその制度やルール
を強化すべく積極的に関与した結果として理解する
こともできよう。

篠崎論文は、華人の中国志向が一気に高まったと
される中華民国の成立期に、ペナンにおいて最も積
極的に中国に関わろうとしたペナン華人商業会議所
を取り上げる。ペナン華人商業会議所に関わってい
た華人にとつて、暮らしの祖国として最も重みを持
つのはペナンであったが、その暮らしは中国との
人・物・金・情報のやり取りの上になり立っていた
ため、中国はルーツの祖国でもあり、暮らしの祖国
でもあった。暮らしの祖国が二つの異なる公権力の
管轄下にあるために、ペナンの華人はそれぞれの公
権力との関係構築に努めた。また暮らしの祖国とし
て最も重みを持つペナンでは、政治に参加する機会
において、アジア人は欧米人と同等の権利を持たな
かった。ペナンの華人は、イギリス的な制度や価値
に照らして、ペナンにおいて欧米人と同等の権利を
自らに与えるよう海峡植民地政府に求めた。暮らし
の祖国における自らの状況を改善するうえで参照し
たイギリスは、ペナンの華人にとつて理念の祖国で

あったと言える。

奈倉論文は、社会主義という普遍性を追求する
「新中国」に共鳴する華人が現れた時代を扱う。
ミャンマーで生まれ育ち、一〇代半ばで文革期の中
国に移った華人女性のライフヒストリーを追い、越
境の中で構築される「ホーム」や祖国といった認識
の複雑さを示す。この女性はミャンマーにいた頃
は、オテイエゴンが暮らしの祖国であり、ルーツの
祖国を祖父の出身地である福建省安溪に、理念の祖
国を「新中国」にそれぞれ見いだしていた。しかし
中国に移った後、想像とは異なる現実を過ごすなか
で、中国は彼女にとつてもはや理念の祖国ではな
くなった。こうしたなかで、幼少時を過ごしたミャン
マー・オテイエゴンがルーツの祖国として浮かび上
がる側面もあった。他方で中国は、自らの家族を築
いた暮らしの祖国となった。ただし、国家に配属さ
れて三〇年間暮らした江西省撫州と、自らの意志で
移ってきた福建省廈門とでは、祖国の重さが異なっ
ており、個人の立ち位置を国家単位でとらえること
の限界が指摘される。

北村論文も奈倉論文と同様、「新中国」成立前後
に東南アジアの居住国を後にした華人を扱ってい
る。しかし、インドネシア地域から移住した華人を

扱う北村論文は、「新中国」ではなく、旧植民地宗主国であったオランダに向かった人たちを事例とする。この事例について、スカルノ期（一九四五～六六年）およびスハルト期（一九六六～一九九八年）へのそれぞれの秩序の移行期を中心に整理する。インドネシア地域からオランダに移住した華人は、現状よりよい生活を目指した結果オランダに行き着き、そこで生活の基盤を構築しており、オランダが理念の祖国であり、暮らしの祖国であると言える。彼らには、ルーツの祖国が二つある。一つは中国である。文化的・社会的に現地（インドネシアとオランダ）化の度合いが高くとも、また当事者がそのことをどれほど強く自覚しているようにとも、彼らは他者から華人として括られてきた。インドネシア地域からオランダに移住した人たちは、ルーツの祖国である中国に向き合う経験を二重にしてきたと言える。もう一つのルーツの祖国は、インドネシアである。自らが文化的にインドネシア化していることを、「アラナカン」という語で自称する者がいる。またインドネシアの名前を冠する組織に所属し、インドネシアに残る家族との関係を維持したり、若い世代のインドネシア人留学生と交流したりするなかで、インドネシアとのつながりを持つ者もいる。

越境者の立ち位置について、出自国か居住国かを問わないこうした見方は、古田元夫のエスニシティ概念に通じるところがあるように思われる。古田はベトナムの事例に即して、個人が自己を世界に位置づけるうえで何らかの人間集団のまとまりを形成する過程と、その人間集団が自らを世界に位置づけるうえで国家という枠組みを選ぶ過程とを、区別してとらえている。文化的な共同体と政治的な共同体とを一致させ、自決の単位である国民国家を創出する過程に注目する議論（アンダーソン一九九七・スミス一九九九・ゲルナー二〇〇〇）に対し、古田は、人間集団のあり方は必ずしも独自の国民国家の形成に収斂するわけではなく、個人と国家との関係の結び方が多様であるという前提の下、人間集団がよりよい生き方を柔軟に追求する過程をとらえようとする。そのため、国民をネーションと呼ぶのに対して、さまざまなネーションの構成員になる可能性を想定して、文化的な人間集団のまとまりをエスニシティと呼ぶ（古田一九九五・四一五）。

本特集に収められた各論文が示すのはまさに、個人と民族と国家とを一对一の関係で固定的に結び付けず、個人や民族がよりよい生き方を柔軟に追求する過程であると言える。その複雑な様相をとらえる

軸として、「三つの祖国」という軸の立て方の可能性を検討して行きたい。

●注

*1 こうした研究の例として、河部（一九七二）、岡部（一九七一・一九八九）、戴（一九八〇）、田中（一九九〇・一九九五・二〇〇二）などがある。

*2 貞好（一九九三）と金子（二〇〇一）は、民族の枠組みが溶解する連帯や、すべての民族が政治的・社会的に平等の権利を保障される体制がなぜ生じなかったのかについて、華人の試みを中心に論じている。「なぜ生じなかったのか」という問いかけには、生じることが望ましいという思いが込められていると言える。

*3 このような問題提起を行っている研究として石井（一九九九）や奈倉（二〇一一・二〇一二）などがある。

*4 ロシア帝国やアメリカなど多民族的な国家において、今いる国家で生きることを前提に、尊厳ある民族として認知され、他の民族と同等の待遇を受けるべく、「流浪の民」であることを否定するなかで、ユダヤ人がシオニズムを強調するにいたった側面について、鶴見（二〇一一）および池田（二〇一一）が論じている。また西村（二〇一一）は、ロシア帝国で活発化した運動で、シオニズムと対置されるブンディズムに着目している。ここではとくに、多民族社会の正統

な一構成員として自らを認知させるためにユダヤ人の文化的固有性を言語を中心に押し出すが、一民族一國家的なシオニズムを否定し、階級闘争の論理でロシア帝国内のさまざまな民族と連帯し、国家のあり方を変えることを通じて、自らも含めた少数派が生きやすい多民族国家の構築に積極的に関わろうとした事例に着目している。森（二〇一一）は、民族自治という制度が広く存在していた帝国（ロシア帝国、オスマン帝国、オーストリア・ハンガリー帝国）が解体し、同質的な主権国家が誕生するなかで、シオニズムの力点が民族自治の獲得から主権国家の実現へと力点を變化させたことを論じる。市川（二〇〇八）は、西欧におけるユダヤ人問題を、近代的な国民国家の成立という文脈の中で整理している。こうした流れがホロコーストによって、また難民化したユダヤ人の処遇をめぐる第二次大戦後の英米の対応により大きく断絶し、イスラエルの建国にいたる過程や、必ずしも自らの意志でパレスチナに渡ったわけではないユダヤ人も少なくなかったことを、野村（二〇一一）が整理している。

*5 二者択一的な見方によらず華人をとらえる試みとして、山本（二〇〇六）がある。

*6 アメリカでは一九一〇年代末から一九四〇年代半ばにかけて、高等教育機関においてユダヤ人学生「割当制」が実施された。これについては、北（二〇〇九）を参照。

●参考文献

- 赤尾光春・早尾貴紀(二〇一〇)「シオニズムを解剖する」白杵監修、赤尾・早尾編(二〇一〇)、七―二八頁。
アンダーソン、ベネディクト(一九九七)『増補版 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、N T T出版(Benedict Anderson 1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition. London and New York: Verso)。
池田有日子「アメリカ・ユダヤ人社会とシオニズム——国家忠誠と同胞意識のはざままで」白杵監修、赤尾・早尾編(二〇一〇)、一〇〇―一二〇頁。
市川裕(二〇〇八)「宗教学から見た近代ユダヤ人のアイデンティティ——近代国民国家と宗教の定義」市川裕・白杵陽・大塚和夫・手島勲矢編(二〇〇八)『ユダヤ人と国民国家——「政教分離」を再考する』岩波書店。
石井由香(一九九九)『エスニック関係と人の国際移動——現代マレーシアの華人の選択』国際書院。
白杵陽(一九九八)『見えざるユダヤ人——イスラエルの〈東洋〉』平凡社。
白杵陽(二〇〇八)『イスラエルの政教分離とユダヤ・アイデンティティ』市川・白杵・大塚・手島編(二〇〇八)、一三―四〇頁。
白杵陽(二〇〇九)『イスラエル』岩波書店。

白杵陽監修、赤尾光春・早尾貴紀編(二〇一〇)『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院。

岡部達味(一九七二)『現代中国の対外政策』東京大学出版会。

岡部達味(一九八九)「ASEANにおける統合と華人・中国」岡部達味編「ASEANにおける国民統合と地域統合」日本国際問題研究所、一―二八頁。
金子芳樹(二〇〇一)『マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治と国民統合』晃洋書房。

河部利夫(一九七二)「東南アジア華僑研究の視点——華僑の同化と非同化と」河部利夫編『東南アジア華僑社会変動論』アジア経済研究所、一―四〇頁。

北美幸(二〇〇九)『半開きの〈黄金の扉〉——アメリカ・ユダヤ人と高等教育』法政大学出版社。
ゲルナー、アーネスト(二〇〇〇)『民族とナショナリズム』加藤節監訳、岩波書店(Ernest Gellner 1983) *Nations and Nationalism*. Oxford: Blackwell Publishers)。

貞好康志(一九九三)「華人がインドネシア・ナショナルリズムを志向した時——コー・クワット・チョンの軌跡より」『南方文化』二〇、三―三八頁。

スミス、アントニー・D(一九九九)『ネイションとエスニシティ——歴史社会的考察』巢山靖司・高城和義ほか訳、名古屋大学出版会(Anthony D. Smith 1986) *The Ethnic Origins of Nations*. Oxford: Blackwell Publishers)。

戴国輝 (一九八〇) 『華僑——「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』 研文出版。

田中恭子 (一九九〇) 『中国外交と華僑・華人』 岡部達味編 『岩波講座現代中国 第六巻 中国をめぐる国際環境』 岩波書店、二八五—三三二頁。

田中恭子 (一九九五) 『華僑華人』 若林正丈・谷垣真理子・田中恭子編 『原典中国現代史第七巻 台湾・香港・華僑華人』 岩波書店、二四四—三二六頁。

田中恭子 (二〇〇二) 『国家と移民——東南アジア華人世界の変容』 名古屋大学出版会。

鶴見太郎 (二〇一一) 『忘れられた世代と場所——「長い一九世紀」最後のロシア・シオニズム』 白杵監修、赤尾・早尾編 (二〇一一)、三〇—五一頁。

奈倉京子 (二〇一一) 『中国系移民の故郷認識——帰還体験をフィールドワーク』 風響社。

奈倉京子 (二〇一二) 『帰国華僑——華南移民の帰還体験と文化的適応』 風響社。

西村木綿 (二〇一一) 『「イディッシュ労働者」運動としてのブンド——ナシヨナリズムと社会主義のはざま』 白杵監修、赤尾・早尾編 (二〇一一)、五二—七三頁。

野村真理 (二〇一一) 『カタストロフィ・シオニズム——ホロコースト後のユダヤ人DP (Displaced Persons)』 白杵監修、赤尾・早尾編 (二〇一一)、二二—四二頁。

森まりこ (二〇一一) 『民族自治から主権国家へ——帝

国解体期のシオニズム運動における民族分離主義の変容 一八八一—一九八四』 白杵監修、赤尾・早尾編 (二〇一一)、七四—九七頁。

古田元夫 (一九九五) 『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』 東京大学出版会。

山本博之 (二〇〇六) 『脱植民地化とナシヨナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』 東京大学出版会。

Chirof, Daniel and Anthony Reid (eds.) (1997) *Essential Outsiders: Chinese and Jews in the Modern Transformation of Southeast Asia and Central Europe*. Seattle and London: University of Washington Press.

Reid, Anthony (1997) *Entrepreneurial Minorities, Nationalism, and the State*. Chirof and Reid (eds.) (1997), pp. 33-71.

● 著者紹介 ●

- ① 氏名……篠崎香織（しのぎぎ・かおり）。
- ② 所属・職名……北九州市立大学外国語学部・准教授。
- ③ 生年・出身地……一九七二年、千葉県。
- ④ 専門分野・地域……マレーシア地域研究。
- ⑤ 学歴……東京女子大学現代文化学部、東京女子大学大学院現代文化研究科・修士課程（現代文化研究専攻）、東京大学大学院総合文化研究科・修士課程（地域文化研究専攻）、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程（地域文化研究専攻）。
- ⑥ 職歴……在マレーシア日本国大使館専門調査員（三五歳、任期二年）、北九州市立大学外国語学部准教授（三七歳）。
- ⑦ 現地滞在経験……マレーシア（マラヤ大学歴史学科・研究生、二七歳、二年、現地調査、三三歳、一年、在マレーシア日本国大使館・専門調査員、三五歳、二年）、シンガポール（シンガポール国立大学歴史学科・客員研究員、三〇歳、五ヶ月）。
- ⑧ 研究方法……マラヤ大学での寮生活・部活動、ハウスシェア、下宿などを通じてマレーシア人とさまざまな関わりを持った経験が、資料の行間を読み解く現地感覚となっている。
- ⑨ 所属学会……日本マレーシア学会、東南アジア学会、アジア政経学会、日本華僑華人学会。
- ⑩ 研究上の画期……二〇〇四年二月二六日に発生したスマトラ沖地震・津波および二〇〇八年七月のペナン・ジョージタウンとマラッカのユネスコ世界文化遺産登録。スマトラ島北部、ペナン、タイ南部において、歴史的なつながりを相互に強調する動きが現れるなかで、ペナンの意義をとらえる視点が大きく開いた。
- ⑪ 推薦図書……古田元夫『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』（東京大学出版会、一九九五年）。